

たな段階への移行を真剣に考える時を迎えたと言うべきであろう。

## 「近現代」の編纂事業を終えるにあたって

編さん委員 伊 東 壮

早いもので、甲府市史の編纂事業が始まって、もう十年の歳月が経ち、私が編纂を担当した「近現代」の通史発刊をもって、史料編と通史は完結することになる。近現代の編纂委員に歴史が専門ではない私が何故選ばれたのか経緯はよく知らないが、近年の甲府市政に多少とも関わりあって来た者として、保有した史料と体験を活用させることをねらったの起用であつたのだらうと思っている。ところが、その私が、大学で評議員、教育学部長などの多忙な職に就き、最初の数年間は殆ど市史の仕事に深く関わり合う暇がなかった。それでも竹山護夫山梨大学助教授が共に編纂委員として、副部長をつとめられ、私はこの専門家がいてのことですっかり安心していたが、近現代の目次案をつくった後、昭和六十二年、先生は早逝された。これは思いもよらぬ痛恨事であり、近現代部会の一つの危機であつた。しかし、幸いなことに、専門委員として有泉貞夫商船大教授、島袋善弘県立女子短大教授、齋藤康彦山梨大教授らの専門家が加わり、資料収集、執筆はもちろん編集にまで援助を賜ったことは、特に「近代」の史料編、通史発刊に対して決定的な意味をもった。

「現代」については、島袋教授を除いては、殆ど専門外の執筆陣であつた。専門家の集団であれば、個々人の執筆を大事にし、編纂者はよほどのことがないかぎり、クレームはつけないというのが、一般の編纂といえよう。しかし、専門外の人々の集団となると、そ

うはいかない。だが、よくしたもので期せずして現代部会執筆陣の中では合議制が生まれた。史料編をつくるにあたっては、一つの史料に委員全体が目を通し、採用、不採用を決める方法をとった。通史については、何人かが目を通し、かなり徹底的にチェックした。その代わり、会議、会議の連続であり、近現代部会の回数は他のどの部会よりも多くなつた。或いはこうした非専門家集団のやりかたは、評価が確定しない「現代」を扱うにはよかつたのかもしれない。そして、いつの間にか、委員の間には親愛感が醸成され、忘年会などでの近現代部会総出のカラオケは、偉観（遺憾？）となつた。こうして、史料編「現代Ⅰ」、「現代Ⅱ」、「通史」も完成していった。

しかし、こうした委員たちの活動を陰でしっかりと支えていたのは、事務局であつた。高木主幹は、作業スケジュールや内容について、学者を相手にするにはどうかと思われるくらい、厳格、厳密であつた。でも、この燃え盛る牽引力がなければ、とても今日までの完成は出来なかつたと断言できる。同時に数野さんを始めとする何十人かの職員の労を厭わぬ努力に対しても最大限の賛辞を呈したい。まったく、ローマは一日でも、一人でも成らなかつたのである。終わりに、竹山先生に事業の完成を報告し、ご冥福を心から祈る。

## 市史編纂事業を終えて

編さん委員 白 倉 一 由

市史編纂事業を終えて私ははつとしてゐる。市史編纂は私にとって魅力あるものであつた。新しい発見、未知なる世界に踏み込んで

いく事に人生の喜びを感じる研究を職業とする者の言い知れぬ楽しみがあった。初め市史の編纂委員をと言われた時にはやってみたい、面白いと思ったが、実際やり通す事はできないと思っていた。

私は現在山梨英和短大の教員をしているが、自分の本職の教育と研究、更に理事までしているので短大の仕事が大変で他のこと等手が出せるものではなく、また出すべきではないと考えていた。しかし山梨の文学の現状を見るにつけひきつけられていき、最後まですることが出来たのは幸せであった。会議など出席しなければいけないのに欠席した事もあったのはすまなく、関係各位に感謝しなければならぬと思っている。

私は山梨は文学不毛の地であると思っていた。この山梨を改変しなければいけないと思っていた。しかし反面江戸・東京に近いこの地であり、武田信玄時代に現れているように英知のある県民に文学のないはずはないとも思っていた。まず山梨の文学的なものをよく探索し、研究しなければいけないと思うようになった。このような私にとって、甲府市史研究と県立の文学館の創設は是非ともしなければならぬことに思えてき、この事に、ない時間を割いて尽力してきた。

甲府市史の仕事はまず近世史料編の江戸時代の俳諧の翻刻から始まった。甲府は江戸時代は全国有数の俳諧の盛んな所であった。それを甲府市民が知らないのである。甲州文庫の主だったものの翻刻は、後世に、甲府市民の過去において偉大な先人達がいた事の証として残る事と思われる。甲府は江戸時代、文学を始め高い文化を持っていたのである。近代においても文学の現状の正しい認識が行われていない。そのため基本文献の確認、それを基にしての通史の執筆

は文学の研究を本職とする私にとって興味あるものであった。特に『山梨日日新聞』その他の雑誌を明治から現代まで全部目を通したことは山梨・甲府の文学、更に文化を知る上での喜びであった。

市史編纂事業における文学の研究執筆は、いままでも何もされていなかった甲府の文学の基本的なものの紹介、文学的価値の認識ができたのである。この事の意義は大きいと思う。

研究しなければいけないと思ってもそれを援助し、企画してくれる人がなければやれるものではない。この点において甲府市史編纂は恵まれていた。高木伸也主幹が文学の研究・掲載に多大な寛容と援助を惜しまなかった事である。文学担当専門委員を思うままに増やし、掲載分量も配慮して下さった。市史編纂においてはできない事である。

文学関係においてこれだけのことができたのは高木伸也主幹、数野雅彦主任、山田武雄、久保寺弘美、宮沢富美恵の各氏の献身的な協力と支援があったからであり、感謝しなければならぬと思っている。

今後甲府市でしなければならない事は文学を初め文化についてである。現在甲府市が住みよい所の全国の上位になっているのは、自然的条件に加え、文化的諸条件が整ってきたからである。特に文学は思想感情の形象化されたもので、人間の本質性とその生き方を問題にしたもので、文化の基本的・最終的なものである。文学の充実が文化の完成を意味すると思う。市史編纂事業の文学の研究執筆は基礎的な最初の確認であって、これを基にして進展していくと思われるので、後世において再評価されたいと思う。